

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

男性の家事参加の促進プロセス:mixedアプローチによる分析

平成24年度～25年度 総合研究報告書

研究代表者 高橋 桂子

平成26(2014)年 5月

目 次

I 総合研究報告

男性の家事参加の促進プロセス:mixedアプローチによる分析	1
高橋桂子・黒川衣代・倉元綾子	
A 研究目的	2
B 研究方法	4
C 研究結果	8
D 考察	32
E 結論	36
F 研究発表	37
G 知的所有権の取得状況	37

男性の家事参加の促進プロセス:mixed アプローチによる分析

研究代表者 高橋桂子(新潟大学人文社会・教育科学系・教授)

研究要旨

共働き世帯が増え、既婚女性の労働市場への継続的な参入が増えている今日、男性の家庭領域への参加を促進させることが急務の課題である。従来の男性の家事参加に関する研究は中範囲理論(相対的資源、時間的余裕、性別役割分業観)によって説明されることが多かったが、男女共同参画社会の形成が喫緊の課題である今日、求められる研究は、何が男性の家事参加を規定するのか、という規定要因を探ることではなく、どうすれば、男性が、より家事に参加するようになるのか、その行動に影響を与える要因や、行動に至るプロセスを解明することである。

本研究は、Theory of reasoned action理論(以下、TRA)を用いて、家事参加をしようという行動意図(intention)に影響を与えるかmixed アプローチによる接近、具体的には研究1年目には、自主研究として実施していた新潟在住の男性への家事参加に至る経緯や家事の意味づけなどに関するヒアリング調査をベースに、秋には連合新潟、連合兵庫、連合徳島と連合鹿児島男性組合員を対象に独自アンケート調査を実施した。2年目は、ヒアリング調査を連合兵庫、連合鹿児島からもご協力いただきながらすすめた。以上のデータをもとに、研究結果を頑健なものにするために30代で、既婚で子どものいる民間企業に勤める正社員を対象に、全国規模のインターネット調査を実施した。その結果、行動意図にプラスの影響を与える変数は、子ども時代の褒められた記憶、家庭科教育の効果、夫婦間の年収勢力や生活というものに対する認識が、逆にマイナスの影響を与える変数としては、妻のgatekeeper的態度や家事分担のあり方に関して夫婦間で話合いがないこと、などであることが明らかになった。

男女ともに家庭と仕事の両領域にバランスよく関わることは、精神的健康という観点から重要である。また、夫の家事参加が多いほど、実際の子どもの数が多いとする研究成果や、仕事と家庭のバランスがとれていると感じる者ほど仕事にやり甲斐を感じるという報告もある。男女共同参画社会の形成や、自身のワーク・ファミリー・バランスの観点から、男性の家庭領域への参加促進を推進する施策は重要と考える。

研究分担者

黒川衣代・鳴門教育大学大学院学校教育研究科・教授

倉元綾子・鹿児島県立短期大学・准教授

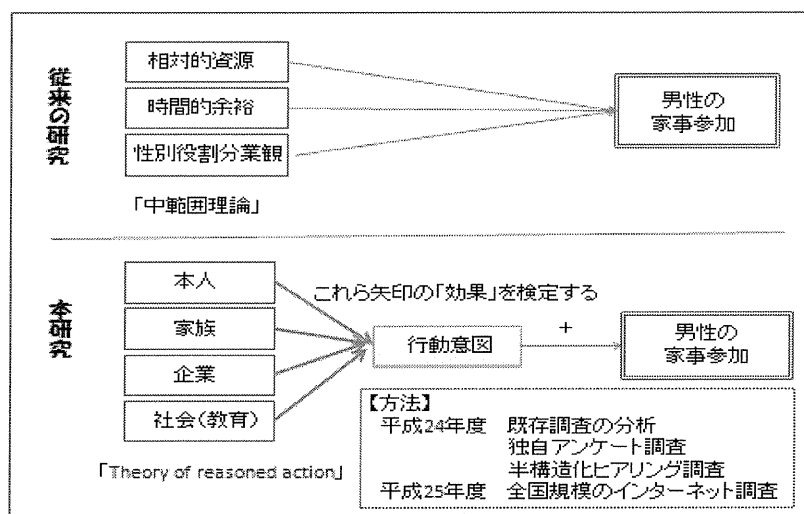
A 研究目的

(目的)

女性と職業の関わりを問う世論調査(2009)によれば、「女性は子どもができてでも職業を続ける」が「子どもができるまで働く」を上回り、意識の上では出産後も女性が職業を続けることを支持している。しかし家事時間は、3歳以下の子のいる共働き核世帯で男性は49分と短く、結果として、職業をもつ女性が仕事と家事の双方に責任をもつ生活スタイルが続いている。

論理的に考えると、出産後も女性が仕事を続けることを支持するなら、女性が担ってきた家事の一部を男性が分担する動きを予想させるが、統計からその動きは確認できない。なぜ、男性は家事を分担しないのか。昨今のイクメン・カジメンを勘案すれば、男性は家事を分担する意識がないのではなく、家事を分担しようという意識・意欲はあるが、それが家事の分担という直接的な行動に結びついていない、と捉えた方が真実に近いと考える。

家事分担を説明する理論は中範囲理論やエコロジカル理論(高橋 2011)を用いる研究が多い。しかし喫緊の研究課題は、男性の家事労働の規定要因を精緻化させることではなく、男性が家事労働に対して如何なる意識をもっているか、どうすれば男性の行動を変容させ、家事労働へのより積極的な参加へと導くことができるのか、影響力の大きな変数を特定し、そのプロセスを解明することである。行動変容プロセスに関する理論には Theory of reasoned action (TRA; Ajzen and Fishbein 1980)やその発展系である Theory of planned behavior (TPB; Ajzen 1985)があり、転職行動 (Lane, et al. 1991)、リサイクル (東・西道ら 2009)、運動継続(須藤 2008)、ダイエット (Lee et al. 2009)やブランド選択 (西尾・宮澤 1987)で援用されている。この理論を男性の家事労働に適用し、半構造化ヒアリングも行い、量的・質的研究(mixed アプローチ)で行動変容プロセスを明らかにすることが本研究の目的である。



(期待される効果)

本研究により期待される効果は次のようである。

行動意図に影響を与える要因として本人(「家事に対する知識・技能」)、家族(「妻の仕事に対する評価」や「妻の gatekeeper 的行動」)、企業(「ジェンダーセンシティブ度」)と社会(男女共修「家庭科教育」の効果)などから検討を加える。質的研究から抽出された個人レベルの意識と量的研究を組み合わせることで、男性の家事参加プロセスに関する新たな経路を見出し、全体像をより鮮明にすることができる。

「家事に対する知識・技能」が行動意図に有意にプラスの影響を与えるなら、家事スキルを高めるための施策を推進すべきである。家族が喜んで食べるメニューを豊富に持つ男性は少ない。仕事においても、他者に比して優れた知識・技能をもっていないと自信ある積極的・果敢な行動は取れない。多様性や栄養バランスに富み、家族が喜ぶ 1 週間メニューを修得できるプログラムを提供する仕組みを作ることも重要である。

「妻の gatekeeper 的行動」が有意な影響を与えるのであれば、女性に対して、自分で自分の首を絞めている状況になっていることを注意喚起すべきである。女性は、男性が仕事で疲れていることを知っており、それゆえ夫のためと思い良かれと台所仕事に関与させないような態度をとっているのかもしれない。夫婦の間でコミュニケーションが多くない日本では、肯定的に意見を表明するアサーティブのトレーニングが社会人に必要という提言もできる。

また、男性の行動は帰属意識の高い企業文化に影響を受け、勤務先が男女均等政策を推進しているほど男性は家事を分担する(高橋 2011)。均等・両立推進企業の表彰も、このような社会的相互作用の観点から再評価し、企業や社会にアピールすることができる。

加えて、男性が家事に協力的であるほど子どもの数が多い、男性が家事分担をするほど集中して仕事を行うという調査結果も追試する。これが立証されれば、ワーク・ファミリー・バランスの重要性を男性の視点から捉え直すことができる。

B 研究方法

2年間の研究実績ならびに、学会発表との関連を示したものが図1である。

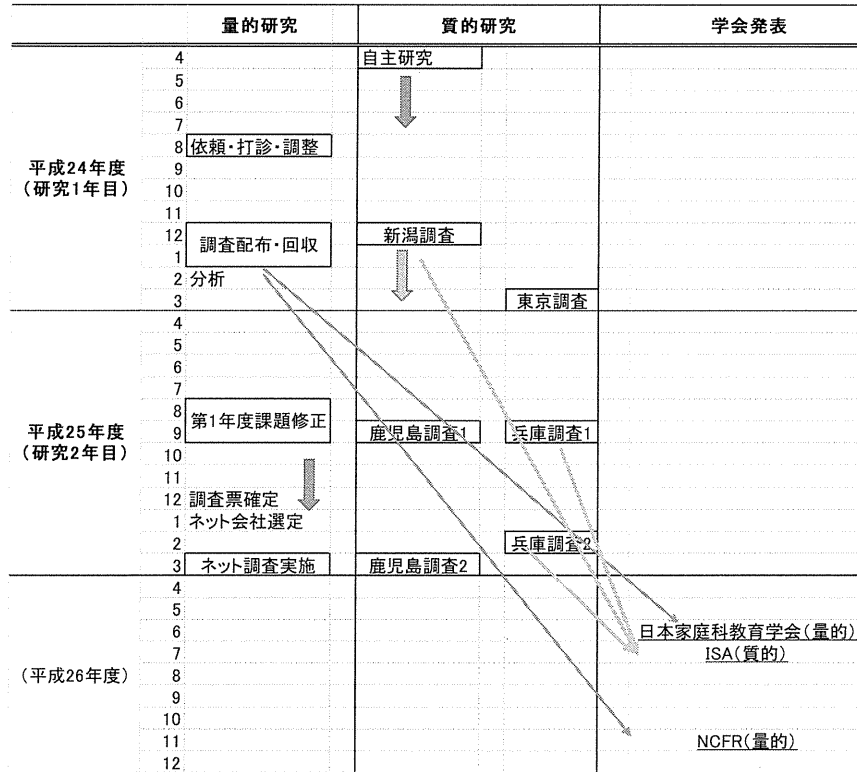


図1 研究全体図

第1年度:平成24年度

平成24年度は、3つの課題に取り組んだ。

研究課題 1-1 独自アンケート調査:連合新潟、連合兵庫、連合徳島と連合鹿児島 (配布 7100、回収 3918、回収率 55.2%)	高橋・黒川・倉元
研究課題 1-2 ヒアリング調査:新潟調査(n=12)、東京調査(n=6))	高橋
研究課題 1-3 「21世紀成年者縦断調査」分析	倉元・黒川

① 研究課題1 独自アンケート調査

自主研究で高橋が進めていたヒアリング結果をもとに、Theory of reasoned action の枠組みによる独自調査を実施した。対象は連合新潟、連合兵庫、連合徳島と連合鹿児島に所属する既婚男性を対象に2012年12月末、調査票を配布した(配布7100、回収3918、回収率55.2%)。配布先は研究組織メンバーの所属県ならびに関連する県である。

従属変数は、炊事、掃除、洗濯といった女性的家事(female works)である。この種の家事に限定する理由は、①ゴミ出し、風呂掃除といった男性的家事はすでに一定程度、男性が担っている、②男性の参加程度が低い家事が女性的家事である、③男性が担ってくれて嬉しいと妻が感じる家事が炊事、掃除や洗濯である、などである。

検証仮説は、次のようである。

仮説 1(本人):家事スキルが高いと自己評価するほど、家事を分担しようと思うだろう。

仮説 2(本人):家事は楽しいと自己評価するほど、家事を分担しようと思うだろう。

仮説 3(家族):妻は重要な仕事をしていると思うほど、家事を分担しようと思うだろう。

仮説 4(家族):妻の gatekeeper 度が高いほど、家事を分担しようと思わないだろう。

仮説 5(企業):勤務先企業が男女均等であるほど、家事を分担しようと思うだろう。

仮説 6(社会=教育):中高時代の家庭科が楽しかったと評価するほど、家事を分担しようと思うだろう。

アンケート調査票を作成する中で上記仮説は適宜、練り直した。「企業」に関する仮説は高橋が、「本人」に関する仮説は倉元が、「家族」と「教育」に関する仮説は黒川が担当した。

実査にあたり、アンケート調査票の印刷・発送やデータ入力は、すべて高橋が一元的に担当した。入力チェック・データクリーニングを行い、SPSS 用に編集したデータを倉元・黒川に配布した。分析は各自が行い、随時、研究会を開催し、分析結果について検討を重ねた。

② 研究課題 2 ヒアリング調査

半構造化ヒアリング調査は、新潟で実施した。対象者は、高橋の個人的知り合い(2名)、友人による紹介(6名)、連合新潟の方(2名)と東京で実施したモニター(6名)の計 18 名である。

あわせて研究課題 1 のアンケート調査の最後に、ヒアリング協力者を募り、ヒアリング調査に応じてもよいという方はメールアドレス、もしくはファクシミリ番号を記入いただいた(無記名)。メンバーが連絡をとり、男性が家事参加している実態、経緯やプロセスなどに関する半構造化ヒアリング調査を行った。なお、1 年目は新潟を先行的に実施し、鹿児島、兵庫、徳島は 2 年目以降とした。質問は以下のようである。

- ・家事分担は、どのようになさっていますか
- ・家事を分担しようと思ったきっかけは、具体的にどのようなことでしたか
夫婦・親子など家族との関係で、仕事との関係で
ご両親、ご近所や知人との関係で、学校教育(家庭科、社会科など)との関係で
- ・あなたが家事を分担することで、何か、変わったことはありますか
- ・あなたにとって、「家事」とは何ですか

③ 研究課題 3 「21 世紀成年者縦断調査」分析

厚生労働省「21 世紀成年者縦断調査」過去 10 回のデータをプールして、中範囲理論による検定力がどのように変化しているか確認する。

男性の家事・育児分担の規定要因を検証する。中範囲理論、doing gender 仮説や同棲効果仮説など、既存の諸理論の検定力を検証した上で、①子どもに対する認識、②夫の、妻に対する就業継続希望の有無、③育児休業制度の利用のしやすさや利用実績など本人ならびに配偶者の職場環境変数、について検証する。具体的には下記の通りである。

7. 分析対象

個人(未婚既婚問わず)、未婚、既婚夫婦

4. 分析の手順:段階投入法

Model 1:既存理論の検証(中範囲理論、doing gender 仮説、同棲効果仮説)

Model 1+ Model 2:子ども観に関する本人意識追加

Model 1+ Model 2+ Model 3:本人の、配偶者に対する就業希望意識追加

Model 1+ Model 2+ Model 3+ Model 4:本人ならびに配偶者の職場変数追加

各段階で新規に投入した変数の効果を検証し、すでに投入されていた説明変数の効果にどのような変化がみられるのかを確認する。それによって、各仮説の因果メカニズムを検証する。

ウ. 分析モデル

分析における多変量解析のモデルを以下に記述する。

【従属変数】

家事・育児時間

(注)「21世紀成年者縦断調査」では、家事分担と育児分担が分かれていない。そこで、本調査を分析するときの従属変数は、研究課題である家事分担ではなく、家事・育児分担となる。

【分析モデルと説明変数】

Model1-1:中範囲理論による、男性の家事・育児分担の規定要因の時系列変化を検討する

説明変数;所得を伴う仕事の有無(複数の仕事の有無、1年前の仕事と同じか、就業形態、雇用保険加入の有無、企業規模・官公庁の別、職業、現在の仕事の開始時期、1週間の就業時間、1週間の勤務日数、1日の通勤時間、通学が主か否か)、所得の有無(働いて得た所得、その他の所得、所得額、児童手当の有無)、家庭観、職業観、同居者の人数、親の生死・同別居、出生年月

統制変数:配偶者の有無(配偶者との同別居、この1年間の婚姻関係の変化の有無、配偶者の出生年月、同居を開始した年月)、配偶者(夫)の家事・育児分担の有無(妻の負担軽減感の程度)、

Model 1-2:doing gender 仮説による、男性の家事・育児分担の規定要因の時系列変化を検討する

説明変数;所得を伴う仕事の有無(複数の仕事の有無、1年前の仕事と同じか、就業形態、雇用保険加入の有無、企業規模・官公庁の別、職業、現在の仕事の開始時期、1週間の就業時間、1週間の勤務日数、1日の通勤時間、通学が主か否か)、所得の有無(働いて得た所得、その他の所得、所得額、児童手当の有無)

Model 1-3:同棲効果仮説による、男性の家事・育児分担の規定要因の時系列変化を検討する。

説明変数;異性の恋人との同居、妊娠の有無

Model 2:子供観が男性の家事・育児分担に与える影響の検討

説明変数;子ども観、子どもをもつ意欲(希望子ども数、出産と仕事に関する周囲の状況、子どもをもつことに関する周囲の状況)

統制変数:子どもの有無(子どもの状況、未就学児の保育サービスの利用状況、未就学児の日

中の世話人)、子育て負担感、保育サービスの状況、支出(保育料、教育費)、子ども手当の受給の有無(役立ち感)

Model 3:配偶者に対する仕事との関わり希望が、自身の家事・育児分担に与える影響

説明変数;出産後の就業継続意欲

Model 4:本人や配偶者の職場の制度活用状況が、男性の家事・育児分担に与える影響

説明変数;職場における仕事と子育て両立支援制度の有無(有給・無給の別、利用にあたっての雰囲気)、職場における仕事と子育て両立支援制度の利用希望、職場における仕事と子育て両立支援制度の利用の有無(育児休業取得期間、子どもの看護のための休暇取得の状況)

【サンプルの選択や基本統計量の確認に用いる項目】

健康状態、結婚意欲(結婚後の就業継続意欲、結婚と仕事に関する周囲の状況、結婚することに関する周囲の状況)、現在の就業意欲(希望する就業形態、求職活動の有無)、初職と現在の仕事の関係、初職から現在までについた仕事の就業期間(初職から現在までについた仕事の就業形態)、1年間にやめた仕事の有無(この1年間に辞めた仕事の就業期間、1年前以降についた仕事の就業形態、1年前の仕事を辞めた理由)、学歴(入学・卒業・中退の有無、年月)、1年間の転居の有無(住居の状況)

Ⅰ. 分析手法

プール分析、パネル分析、マルチレベル分析(地域と個人)など

第2年度:平成25年度

平成25年度は、以下の3つの課題に取り組んだ。

研究課題1 ヒアリング調査の継続(鹿児島、兵庫)	高橋・黒川・倉元
研究課題2 インターネット調査による全国調査の年	高橋・黒川・倉元
研究課題3 「21世紀成年者縦断調査」(継続)	倉元・高橋

① 研究課題1 ヒアリング調査の継続(鹿児島、兵庫)

平成24年度アンケート調査で、ヒアリング調査に応じて良いとの連絡をいただいた方を中心に、随時、ヒアリング調査を実施した。対象は、鹿児島と兵庫である。連合兵庫は高橋と黒川が、連合鹿児島は倉元と高橋が担当した。

② 研究課題2 インターネット調査による全国調査の年

平成24年度の3地域を対象としたアンケート調査結果やこれまでの半構造化ヒアリング調査の結果を踏まえて、必要に応じて調査項目や尺度を再検討した後、全国調査を実施した。手法はインターネット調査である。初年度の研究から家庭科教育の評価が男性の家事参加に対して影響を与

えていることも確認されたので、年齢は 30 歳代、民間企業で正社員として働く既婚有子 2000 人とした。初年度は配布地域が新潟、兵庫、徳島と鹿児島と、地方圏であったため、2 年目はインターネット調査の強みをいかし、各年齢首都圏とその他を 1:1 の比率と設定した。

インターネット調査会社からエクセル形式で入手するデータは、高橋が SPSS 用に加工・編集して黒川・倉元に渡した。各自が問題関心に基づいて分析を行い、継続してミーティングを行い、連名/単独で学会発表する。

③ 研究課題 3 「21 世紀成年者縦断調査」(継続)

データをプールして、夫の家事参加がどのように変化しているか、夫の家事育児参加に影響を与える要因、妻の側の要因との関係について分析を行うとともに、夫の家事参加に関連する要因、子ども数の増加に関連する要因の時間的変化を明らかにする。

(倫理面への配慮)

アンケート調査(無記名)・半構造化ヒアリング調査から構成される本研究は、頑健な分析を行うために家族構成をはじめ、回答者の年間収入や年齢など経済変数が必要になる。回答者のプライバシー確保には十分な配慮を行い、得られたデータは純粋に学術的な目的にのみ使用し、回答者名が外部に漏れることがないように注意する。データ入力・クリーニングが終了した時点でアンケート調査用紙はシュレダーにかけて廃棄処分する。参加協力依頼の時点やインタビュー時に、研究趣旨を書面もしくは口頭で丁寧に説明する。

C 研究結果

第 1 年度:平成 24 年度

研究課題 1-1 独自アンケート調査:連合新潟、連合兵庫、連合徳島と連合鹿児島 (配布 7100、回収 3918、回収率 55.2%)
--

① データと基本的特性

データは、2012 年、連合新潟・連合兵庫・連合徳島と連合鹿児島所属の既婚男性を対象とするアンケート調査(郵送法)により実施した。回収した調査票は 3918(回収率 55.2%)である。分析データは、3918 サンプルのうち、用いる変数に欠損値のないサンプルである。その結果、1297 となる。

主要な基本的属性は次のようである。平均年齢は 41.2 歳(標準偏差 7.34)、同居子の数は 1.82 人、末子の約半数は未就学児である。学歴は高卒が最も多く、3 人に 2 人は一人暮らしの経験があり、現在は、親と同居している割合は 4 割である。

② 変数

従属変数

家事労働の参加 (以下、家事参加) この項目は家事労働に参加する行動意図と同じ 8 項目から

構成される。自己評価で「行う」から「行わない」の 4 件法で評価した。この変数は 8 項目を合計して、得点が高いほど、家事労働の参加が高いことを示す。

説明変数

妻の gate-keeper(門番)度:gate-keeper に関しては、尺度の妥当性・信頼性の確保が課題の 1 つである。今回は 7 項目用意したが、ここでは Allen & Hawkins 1999 による、gate-keeper の代表例である 3 項目を用いる(4 件法)。具体的には「妻は、家事は自分の仕事、と思っている」、「妻は、家事は、男性のする仕事ではない、と思っている」と「妻は、家事はやり甲斐のある仕事、と思っている」である。合計値を得点とした($\alpha = .645$)。得点が高いほど、gate-keeper 的な考え方を持っていることを示す。

妻の仕事の重要さ:7 項目・4 件法で尋ねた。具体的には、「妻は、大切な仕事をしている」、「妻は、社会的に意義のある仕事をしている」、「妻は、仕事をイキイキと取り組んでいる」、「妻は、仕事にやり甲斐を感じている」、「妻は、家庭に仕事にと、大変そうだ」(逆転項目)、「妻は、仕事を楽しんでいる」と「妻は、仕事を通して、成長している」である。合計値を得点とした($\alpha = .756$)。得点が高いほど妻の仕事に対して肯定的な評価をしていることを示す。

家庭科教育の効果 :家庭科の授業を通して、どのような理解が深まったか 8 項目・4 件法で尋ねた。具体的には「家庭科の授業を通して、親の役割についての理解が深まった」、「家庭科の授業を通して、男女平等意識が高まった」、「家庭科の授業を通して、生活を科学的にみつめるようになった」、「家庭科の授業を通して、家庭生活は男女協力して営むものと考えようになった」、「家庭科の授業を通して、家族のことを考えるようになった」、「家庭科の授業を通して、生き方や考え方が変わった」と「家庭科の授業を通して、家庭経済の理解が深まった」である。合計値を得点とした($\alpha = .935$)。得点が高いほど、家庭科の授業により、生活に関する知識理解が深まったことを示す。
知識・技術:自分の家事に関する能力について 4 項目・4 件法で評価した。具体的には「私ができる料理のメニューは、多い」、「私は、美味しい料理を作ることができる」、「私は、家事の仕方をだいたい知っている」と「家事の仕方がわからないとき、本やネットですぐに欲しい情報を見つけることができる」である。合計値を得点とした($\alpha = .807$)。得点が高いほど、自分の家事に関して高い自己評価を行っていることを示す。

勤務先均等度:職場の風土はファミリーフレンドリー的観点と、均等的観点の 2 つからたずねている。ここでは前者は時間的余裕(午後 7 時までの帰宅時間)と相関が高いので、後者のみ用いる。5 項目について 4 件法で評価した。具体的には「私の職場では、女性が会議に参加している」、「私の職場では、女性が出張する機会がある」、「私の職場では、女性が役職についている」、「私の職場では、女性社員を育てていこうという雰囲気がある」と「同期入社的女性たちは、よく頑張っていると思う」である。合計値を得点とした($\alpha = .889$)。得点が高いほど、勤務先は均等度が高いと回答者が評価していることを示す。

デモグラフィック変数

年齢(歳):2012 年 12 月 1 日現在の回答者年齢である。

最終学歴:「1. 中学」、「2. 高校」、「3.高専・短大」、「4.専門学校」、「5.大卒以上」である。

居住地の人口規模:「1. 5 万人未満」、「2. 5 万~10 万人未満」、「3. 10 万~20 万人未満」、「4.

20万～30万人未満」、「5. 30万～50万人未満」、「6. 50万～80万人未満」、「7. 80万人以上」である。

現在、親(義親含む)同居:「1. 両親同居」、「2. 母親同居」、「3. 父親同居」、「4. 隣居・近居」と「5. 同居していない」である。数字が小さいほど家事を手伝ってくれる傾向にあると考えるので、予想される符号はマイナスとなる。

同居子の数 :「1. 0人」、「2. 1人」、「3. 2人」、「4. 3人」と「5. 4人以上」である。

末子年齢:2012年12月1日現在で、「1. 0～3歳」、「2. 4～6歳」、「3. 小学生」、「4. 中学生」、「5. 高校生」と「6. 大学生以上」である。

③ 結果

(階層的回帰分析)

Model1ではデモグラフィック変数を、Model2では家事に参加しようという行動意図に影響を与えられる配偶者要因(「妻の仕事の重要さ」と「妻の gatekeeper 度」)、職場要因(「勤務先均等度」と教育要因(「家庭科教育の効果」)を中心にみる。

配偶者要因はともに0.1%水準で有意である。つまり、妻が重要な仕事をしていると思うほど、夫は家事をやろうと思ひ、妻の gatekeeper 度が高いほど、行動意図にはマイナスの、抑制効果を与えている。職場変数は有意ではない。教育効果は絶対値(影響力)はそれほど大きくないが、家庭科教育を通して生活のことを学んだと思っているほど、家事に参加しようという意図は高くなる。また、本人の家事に関する知識や技術が高いほど、行動意図が高くなっている。

表 1 家事参加の行動意図(研究 2)を従属変数とする階層的回帰分析

	Model1	Model2
(定数)		
居住地の人口規模	.008	-.001
最終学歴	.098 ***	.046 +
現在、親(義親含む)同居	.241 ***	.231 ***
同居子の数	-.001	-.001
末子年齢	-.224 ***	-.196 ***
一人暮らしダミー	.024	-.003
妻の仕事の重要さ		.097 ***
妻の gatekeeper 度		-.139 ***
勤務先均等度		.024
家庭科教育の効果		.093 ***
知識・技術		.303 ***
F値	23.022 .000	35.910 .000
修正済R2値	.106	.244
ΔR2値	.111 .000	.140 .000
サンプル数	1297	1297

(パス解析)

パス解析は欠損値のないサンプルが対象となる。そのため、職場要因(「勤務先均等度」)変数を用いることで回答者本人(既婚男性)が雇用労働者であること、妻の仕事の評価変数を採用することで妻も何らかの仕事に関わっているサンプルが対象となっている。

本研究の対象となる共働き夫婦のうち、変数すべてに欠損値のないサンプルは、1709となる。

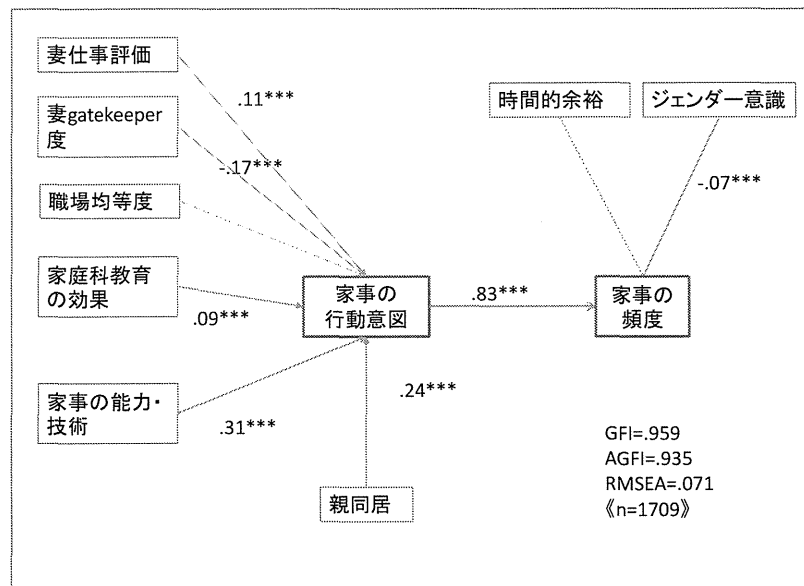


図2 パス解析の結果

統計的適合度も高く(GFI=.959, AGFI=.935, RMSEA=.071)、TRAを家事参加に適用することの妥当性が示された。

パス解析からは、一般的態度、結果に対する信念、動機的信念や家事能力が高いと有意に家事参加の意図を高めるが、性別役割分業意識が高いと有意に家事参加の意図を抑制する結果を得た(本結果をもとにNCFR: National Council on Family Relations 第75回年次大会、2013年11月、テキサス州、サン・アントニオにエントリーしている)。この結果は、家庭科共修世代も含めて、家事能力を高めるために、家事に関する知識やスキルを習得させる場・機会を設けることの重要性を示唆している。実際にアンケート調査票自由記入欄に料理、掃除に関する講座を希望するものは多い。

研究課題 1-2 ヒアリング調査:新潟調査(n=12)、東京調査(n=6)

30代から50代までの計18名の既婚有子男性にヒアリングを行った。その結果、家事関与が高い男性には、①中学・高校で、家庭科の時間に調理実習で何を作ったか、「記憶が鮮明」であるほど、家事参加が高い(家庭科教育効果)、②家事をするのは、自身の息抜きのため、もしくは趣味や夫婦共通の時間を創りだすものとしての認識(時間創出・共有仮説)、③家計管理は、小遣い型ではなく、生活費拠出型もしくは夫婦共同管理型が多い(家計管理仮説)、④

家事をするのは妻が自身と同額稼いでいるから(年収同等仮説)、などが抽出された。就学前の子が複数いる場合には、育児と家事は不可分であり融合ケースが多かったが、妻の gatekeeper (門番) 度が高いと認識している夫は、育児は積極的に関与するが、家事への関与は意識的に控えることを報告するケースがあった。

① ②③を強調したS氏ケース、③と④を強調したI氏ケースを紹介する。

S 氏

日時:2012年12月21日(金) 17:30~18:30

場所:UCCカフェプラザ長岡駅ビル店

ヒアリング:高橋桂子(文責)

プロフィール

34歳、宮城県出身。長岡市在住。妻とは大学時代に知り合う。公務員

キーワード

シンプルな生活、カフェのような我が家、合理的・効率的、美味しい料理(クックパッド、趣味のランニングのための料理)、豊かな生活

家事の現状

- ・料理:買い出しや野菜を切るのは妻、メニューを考え、買ってくる食材を決めたり料理の最後の味付けを確認するのは夫(料理の主導権は夫)。買い出しの指示は携帯で。台所にはスパイス(GABAN)がズラリ!
- ・掃除:トイレの掃除は妻、風呂の掃除は夫。風呂蛇口をピカピカに。「綺麗だと良い感じ」
- ・洗濯:共働きのなので部屋干し。洗濯干す用の(倉庫的な)部屋があり、そこで扇風機・除湿機を使って乾かす。洋服などはハンガーにかけたまま。下着・パジャマ等はそれぞれの籠があり、乾いたらそこに入れる。基本、畳まない。
- ・家計管理:夫がレシートや光熱費関係の支払いをPCに入力。
- ・「夫婦二人の時間を紡ぎ出すために一緒に家事を行う」
- ・「(料理など)新しく出来るようになったことの達成感を感じると、また頑張ろうと思う」

家事の分担・経緯

- ・そもそもは、奥さんが料理している姿をみて「そうかな?料理は得意分野じゃないな」と思ったところからはじまる。例えば、野菜の煮え上がる順番を予想して鍋に野菜を煮えにくいものから入れているとか、スパゲティにしても、ソースが出来ると同時にパスタもアルデンテに茹で上がる手順で料理をしているか、という所から。タイミングを考えて「こうやってやるんだよ」といつてやってみたこともある。美味しいものを食べたいし、効率的に家事を行いたいから、自然と料理に関与するようになった。
- ・週末に夫婦で買い出しをしたり保存食を作ったりする。野田琺瑯のWhite seriesで保存。新聞は購読していないので、チラシはみない。

・ルンバはスケジュール機能を備えた機種を購入。ルンバが掃除しやすいように部屋に余分なものは置かなくなった。スケジュール機能を利用しているため、週2回程度、定期的に片づける習慣が出来ている。掃除機だけの時は正直、足の裏がジャリジャリすることもあったが、現在ではそれもない。実は風邪もひかなくなった。

・共働きであり部屋干しをしているが、仮に室外で干すとしても自分はやるだろう。ご近所の眼？ それは意識しない。

・ゴミ出しは「奥さん」

家計費の分担

・夫から妻に家計費(日用品・食費)として月3万円渡す。「残ったらお小遣いにしているよ」といっている。野菜はご近所や妻の実家から、米は自分の実家からもらっているし、スーパーで買う食材は豆腐、ヨーグルトや卵などに限られるので「多分、余っていると思う」。

・妻は自分の給与から1万円を小遣いとしている。各種料金(クレジットカードや光熱水費、家賃など)の引落口座と給料の入金口座は一口座で管理。残りは貯金。

・(テレビにあったように)自分がレシートや光熱費関係の支払いをPCに入力しているが、「一定額の預貯金となるようにザックリと管理している。」

・節電を徹底しているので、電気代は1ヶ月5,000円に達しない。(震災後に徹底した)

・今年から固定電話回線を解約した。

職場の整理整頓

・職場ではなるべく机の上は綺麗にしている。仕事が一段落した時など、帰宅前に机の上をウエットティッシュで綺麗に拭いて帰るようにしている。一種の儀式。「机の上を綺麗にして帰った方が、良い仕事がまわってくるぞ」と3年前くらいに先輩に言われた。有名人の話にも同様な内容があり、実践したところ仕事もうまく回るようになった。

家庭科教育

・男女共修だった。記憶に残っている調理実習は小学校時代の「カレー」と「豚汁」。特にカレーは、材料の買い出し(予算制約あり)から友人たちと一緒にスーパーにいった、カレーの銘柄はバーモントだ、印度カレーだ、いやジャワカレーだといって「ゲーム感覚」で友達と楽しくワイワイやった。最終的に印度カレーとジャワカレーのハーフ&ハーフでカレーを作った。味についての記憶はないが作るまでの過程は、鮮明に覚えている。その他、中高で調理実習をしたと思うが、記憶にない。楽しくなかったから、美味しいと思わなかったから、記憶にないのではないか。

・豚汁も大根、人参、牛蒡、豚肉といった材料や、葱をどの段階で投入すると美味しいかなどコツは知っている。作ろうと思えば、今でも作れる。

実家での高校時代

・両親は共働きだったが、父親は家事に関与していない。

・食にはこだわりがあった。「逸品のこだわり」。たとえばカレー。母親が作ったカレーに「インスタントコーヒー」を加えて自分好みの味にアレンジしていた。家族、とくに母親は「何なの？」っ

て感じだったが。その他、カツオの刺身にマヨネーズをつけて食べるのも、現在では若者向けに受ける食べ方だが、美味しかったから高校時代からやっていた。

一人暮らし時代

・料理は結構した。母親からスープ(ミネストローネ)の作り方を教わった。スープは野菜や豆、トマトがたっぷり入ることから栄養満点だし煮込んでおけば良いので簡単で美味しい料理だった。その他はレンジで蒸し野菜料理など。

・やはり「料理は家庭の教育が大事」。自分はリンゴの皮の向き方、具体的には左手の添え方や、玉葱のみじん切りの仕方など、小学生か中学生の頃、母親に教えてもらった記憶がある。多分、自分がやりたそうだったから、母親が教えてくれたのだと思う。弟も結構、料理をする。

家事とは何か

- ・家事って思わない、必要なもの、呼吸するのと同じ、食べないと生きられない。仕事とは違う。
- ・つまらないもの、誰もしたいものと思わないものかもしれないが、必要なもの。
- ・効率的に夫婦が共にやると、自分たちが実現したいと思っている夢や趣味に使える時間が増える。
- ・効率的にやればよいので、缶詰でもレトルトでも何でもよい。

キャラ弁の流行について

・臨機応変に臨めばよいのでは？ 時代も変わるし、作れば自信にもなる。効率的にやれば良いので、子どもが出来きたら、キャラ弁グッズを使って作るだろう。

その他

・理想のライフスタイルは、シンプルでメリハリのきいた生活。結婚当時は妻が自宅から鏡台やら家具を運び込んだが「それはいらないでしょう」といって戻させた。モノを極力買わずに整理しながらシンプルに生活する。食材も同様。極力、食材のストックは置かないようにしている(保存食・缶詰等は結構ある・・・)。モノに溢れていたらモノの管理にエネルギーや時間が必要になる。逆にいえば、野菜などは買ってきたものは残さず使う。

・我が家は「カフェ的な感じにしたい」。仕事から帰った時にゆったり寛ぎたい。

・中途半端ではなく、メリハリのある生活。たまに外食するのなら自宅では作れない、美味しいもの、居酒屋料理、B級グルメ等、新しい料理のインスピレーションを引きだすようなものを食べたい。

・趣味はランニングや旅行。ランニングはウオーキングから始まった。現在は1時間ほど走っている。マラソン大会に参加したりウェアやグッズで結構、お金はかかる。

・弁当を持参している。

I 氏

日時:2013年2月12日(火) 16:00-17:15

場所:新潟市内会館

ヒアリング:高橋桂子(文責)

プロフィール

37歳(行政職)、妻(38歳)と男子2人(小学5年生、5歳)の4人家族。フルタイム正社員(公務員)カップル。住まいは両親と同居。玄関のみ共有の二世帯同居。ご結婚は、職場結婚(市役所で同じ課に所属)。

料理

母親は高校生の頃、フルタイム勤務になったが、自分たちのは母親が担当していた。父親は当時は、家事はしなかった(現在もしていないが、たまにカレーくらいは作るようだ)。

現在、平日の朝食は、自分と子供2人の3人分を用意。平日の夕食は、自分と妻の2人分。夕食の担当をしはじめたのは、第2子が生まれてから。特に夫婦でどちらが担当するか、話し合いをしたわけではなかった。妻は料理があまり得意じゃないし、仕事から戻ると保育園との連絡帳を見たり書いたりするのに忙しそうだった。妻の作る料理は「保健師という仕事柄か、塩分控えめで、味がない」。とくに妻に作ってほしいとは言わなかったが、味が薄いというクレームは言っていた。「美味しいものを食べたい」、ならば「自分で作ればいいや!」という感じだ。

現在は、自分たちの帰りが不規則でもあり、子供たちは1階の両親が定時に夕食を用意して食べさせてもらっている。食費として月1万円両親に渡している。最初は自分たち夫婦の分も含めて4人分、用意してもらっていた(月2万円渡していた)が、帰宅時間は夜8~9時になることもあり、家族の食事時間には間に合わない。「帰るコール」はするものの、「片付かない」と文句をいわれる。夫婦2人の夕食ならどうにもなるし「夫婦の分はいいよ」。それ以降は、自分が作っている。

休日は、焼きそばや牛丼などを昼食に作る。「パパの方が(ママより)美味しい」(長男)といってくれる。昔は外で食事をする「やっぱり、外の方が美味しい」だったが、今は「外より自宅の方がずっと美味しい」。

「家飲み」で作るつまみは、グラタン皿に冷凍フライドポテトを敷いてピザ用チーズをふりかけ、斜め切りしたウインナーをおいて、その上にトマトソースやチーズを振りかけてオーブンで焼く。ジャーマンポテト風で簡単にできるし美味しい。手抜きで、かつ受けの良いレシピをもっと知りたい。妻がしている料理関係の家事は、夜、朝ごはん用にお米をとぐこと。

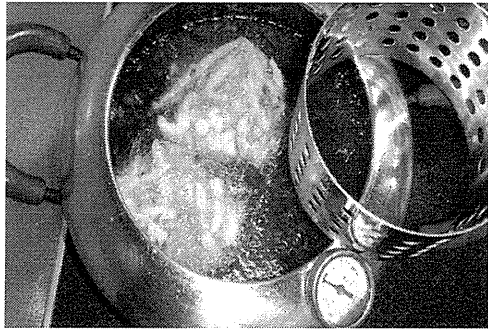
料理メニュー

かき揚げ:総合生協で専用器具を購入。1,000円くらいだったか。台所にある野菜を適当に、彩り良くミックスして作る。1分もあればできる。大量に作って冷凍し、夜食のラーメンや鍋焼きに入れて食べている。

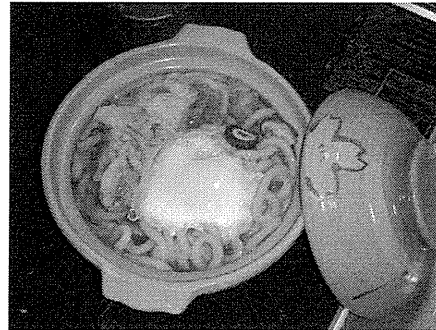
イカリングフライ:クックパッドをみながら作る。

冷しうどん:ワカメ、キュウリ、大根おろしやきざみ海苔をかけて食卓に出す。彩もよく、食が進む。

煮物:冬至の煮物として、鍋に生ラーメン、カボチャを入れて作った。手羽先に人参やジャガイモを入れて作ることもある。これは子供が大好きな料理だ。妻が作ると材料が手羽先からこんにゃくやキノコなどに変わる。これじゃ子どもは食べないだろう。



かきあげを揚げている



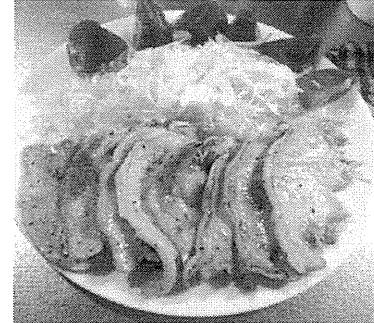
鍋焼きうどん



イカリング
(撮影)I氏



冷しうどん



ショウガ焼き

料理には「小技」が必要。それがあるとグンと美味しくなる。レトルトあんかけなども、家庭にある野菜など具材を適宜、追加すると楽しい。素ラーメンで食卓に出すのはおもしろくもない。肉系の具材としてベーコンかハム、火の通りやすいモヤシや甘味のあるコーンを加えると、子どもたちも食欲が湧いて良く食べてくれる。コーンも、缶詰を適当に小分けして、ジップロックなどファスナー付の袋に入れて冷凍保存。常備食材の1つ。

料理のスキル習得

料理の作り方(洗濯の仕方も含む)は、最初は妻から教えてもらった。最近も「鰯のさばき方」を尋ねた。料理本は2冊しか購入していない。後は、地元新聞に掲載されたレシピ、ネットのレシピを見ることが多い。その他、強気に役に立っているのが「調理員さん」の意見だ。組合関係の仕事で交流ができて、イクメンの私にいろいろ教えてくれる。調理員さんは、「男性の料理は、一般的に、融通が利かなくて、高い食材も平気で買うが、それでいて、手間はさほどかけない。しかし岩野さんは、有るものや安く買えるもので美味しく作る工夫をするから、凄いね」と言ってくれる。

料理に対するこだわり

こだわりの1つに、「塩」の使い方がある。料理用の塩には、塩水を蒸発させて作る塩と、岩塩鉱で掘った塩である岩塩があるが、海の食材には山の塩を、逆に山の食材には海の塩を使うと美味しい。

カレーのルーも、数種類ミックスさせると美味しい。

子どもとの関わり

長男はおなかやすくのか、夜食としてラーメンの作り方を教えて、とってきた。自宅には冷凍のうどんやラーメンを常備している。そこに、手作りの冷凍かき揚げを電子レンジで温めてのせて食べるのが我が家流。

台所や調理器具

調理器具の更新は自分の担当。「20センチのフライパン」は日常使いだから、1,000円程度の、ホームセンターやスーパーで売っているものでよい。傷んできたら1~2年でドンドン更新する。「30センチのフライパン」は炒めものに使う高級品で3~4,000円はする。現在のものも3年目。大事に使っている。

ガスコンロ(3口)も欲しいものがあった、昨年夏のボーナスで購入した。ガラストッププレートで、掃除も楽だし、つねにピカピカで気持ち良い。型落ち商品で8万円くらいした。このような台所整備の更新は、親と相談しながら行っている。

年末の大掃除で台所は「きれいにした」。ペットボトルや缶も台所内で分別できるよう「所定の場所をもうけている」。「妻には汚すから、あまり使わせない」と言いたい。

育児休業を8週間取得(第2子)

第2子のとき、育児休業を8週間、取得した。長男が年長さんで保育園生活に馴染んでいたこともあり、「里帰り出産」という選択肢はなかった。ちょうどその頃(2007年頃)、次世代育成支援対策推進法に基づいて、事業所が行動計画を策定しなくてはならない時だった。それもあってか上越市役所の人事当局から「とってみませんか」といわれた。職員数が2000人規模だから、職員の家族状況などもよく把握しているのだろう。市役所では男性の育休取得者は自分で6人目だった。

妻の「帯があける」までは、料理、洗濯、掃除、保育園送迎すべて担当した。「使えばいい」といわれたが、洗濯もした。一番嫌だったのは、洗濯ものを片付けること。干すのは好きだった。畳んだ洗濯ものも、それをどこに片付けたらよいか、わからなかった。

長男が通う保育園の「保育園ルール」にも戸惑った。連絡帳には毎日親のコメントを書かなくてはいけませんが、何を、どう書けばよいか、わからなかった。名札をつけろといわれても忘れたりした。着替え用の洋服を持参するが、どこに何を入れたらよいか。「所定の場所」がわからない。パンツもプール用のパンツと泥遊び用のパンツなど、細かく分かれていて慣れるまで苦労した。

育児休業を取得した8週間、もっともストレスになったのは、家事をすることではない。「時間があっても、話をしたり遊ぶ人がいない」ということだ。「女性は、同じような環境の人が周りにいていいなあ」と心底、思った。女性は育児ママ同士で出かけていってお茶会ができる。町内にもネットワークがある。しかし、育児パパにはそれが無い。掃除洗濯や料理は4時間もあれば終了する。育児休業中は、職場との接点が切れている。時間ができても、まさか同僚を飲み誘うこともできない。だから帯があけてからの金曜日か土曜日は、地元の同級生を誘って飲みに行っていた。

育休取得の経験と仕事

自治労との関わりは実質5年、専従になって2年だ。育児休業取得者と連絡をとったり、情報提供を行っている。育児休業をとったということは、組合でのキャリアに役立っている。「ご自分の経験でお話してください」といわれ、子育て支援として制度の学習会に体験談を含む講師をしている。男女平等推進やワーク・ライフ・バランスに積極的に取り組んでいる。

一人暮らしの経験

高校生時代、スキー場で通算6か月間、バイトをしたが、これが唯一、親許を離れた経験。ただし、食事は賄付だったので、自炊の経験はないが、掃除と洗濯はした。

家庭科教育

中学校では家庭科履修した。裁縫、料理をしたと思うが、具体的に何をしたか、面白いとか楽しかったという記憶は、ない。キャンプでカレーを作ったが、その時も「野菜を切って、持っていらっしやい」といったものだった。米は、飯ごうで炊いた。

家計管理

電気・ガス・水道など光熱費関係のメータは1つ。費用はすべて親世帯と折半している。新聞代や町内会費は親負担。代わりに、光回線の使用料を支払っている。

妻の給与も自分が管理している。妻には小遣いとして毎月2万円、渡す。自分の小遣いは3万円(以前は1万円だった)。日々の生活に必要な現金は手提げ金庫に月初めにある程度、あるようにしている。手提げ金庫の具体的な用途は、週末の食材の買い出し(1回7,000円ほど)、仕事人として生きていくための必要経費である妻の美容院代、洋服代も含まれる。それは「生活していくのに必要だから」。高級時計など趣味の範疇のものは小遣いから拠出するようにいっている。たとえば、メガネを変えたばかりなのに、週末用のファッショナブルなメガネが欲しい、となったら、それは自分の小遣いから、となる。

親世代の意見

両親は、基本的に成人するまでが親の仕事だ、と言っている。結婚して所帯を持ったのだから、と甘えは許されない。でも、孫はかわいいから面倒をみるのだろう。

すべての前提に

すべての前提に、妻が自分と同額もしくは(1歳年上で公務員ということもあり)少し多い給与を稼いでいる、ということがある。仮に、妻がフルタイムで働いていたとしても年収200万円に届かないようなワーキング・プア的な働き方だったら、当然、家事はすべて妻にやれ、といっているだろう。

家事とは何か

料理は、家族とのコミュニケーション手段だし、美味しくものを食べるための手段だ。楽しいかといわれれば「それは微妙」。自分や家族の要求を満たすためにやっている。平日の夕食は2人分、作りながら、つまみながら食べている、という感じ。

その他

・チラシはみないが、親は気が向くと、特売品を教えてくれる。